Lucy Williams

Global Marriage: Cross-Border Marriage Migration in Global Context

Palgrave Macmillan, Basingstoke, 2010, viii+250pp.

わが国およびその周辺で近年顕著になっている人口学的現象としては国際結婚（cross-border marriage）があげられるが，本書はその現状を世界全体のスケールで概観した力作である．ただし，地理や統計を示す図表は全く掲載されておらず，国際結婚の意義や性質をめぐる定量的でない議論が多数の文献の引用によって展開されていく．また，「移住，マイノリティーおよび市民権（Migration, Minorities and Citizenship）」というシリーズの１冊となっており，移民の制度上の位置づけに著者の関心があるため，事実婚でなく法律婚に焦点があてられている．

導入部分である第1章に続いて，第２章ではジェンダーと関係が深いという国際結婚による移動の基本的な特性が述べられる．さらに，第３章では構造とエージェンシー（agency）という枠組みが提示される．この「エージェンシー」は，結婚の仲介者のことではなく，「行為主体性」と呼ぶべきものであって，移民は制度的・文化的構造にただ従属しているのではなく逆に構造に影響をあたえているという著者のスタンスを端的に表す概念となっている．

第４章は，国際結婚を世界全体のスケールで概観するという本書の目的を集約的におしすすめる部分であり，ここには若干の定量的な記述がみられる．第５章ではメール・オーダー・ブライド，人身売買等の女性の人権問題としての要素が詳述されており，この章が最も長いことが国際結婚の一般的なとらえられようを象徴していると思われる．

本書で地域をタイトルで特定している章は，南アジアについての第６章と東アジアについての第７章のみであるが，内容は全く対照的である．第６章の事例は，南アジアに起源をもつコミュニティーが国際的なひろがりをもっているがゆえに，文化を共有する男女の結婚が国際結婚に該当するというものである．一方，第７章の事例は，東アジアの男性が経済格差を背景として異なる文化をもつ女性と結婚するというものである．国際結婚を異文化間交流か否かで大別するならば，中国，フィリピン等からの女性の流入で婚姻件数が支えられているわが国の視点は一方に偏るといえるかもしれない．２種類の事例が混在しているのが，第８章でとりあげられる難民のコミュニティーにおける結婚である．難民というのは，著者が強い関心を寄せる研究テーマであると推察される．

第９章では政策が国際結婚におよぼす影響がとりあげられる．第10章では移民の生活に焦点があてられ，離婚の問題に議論がおよぶ．まとめの第11章では，多様な国際結婚を大きなスケールで比較する本書のようなスタンスと対象を限定して掘りさげた分析を行うスタンスの両方が重要であること等が述べられる．

広範な文献調査によって作られた本書において定量的な色あいが非常に薄いということは，既存研究が統計の面で十分とはいいがたいことの反映であるように思われる．大きなスケールで適用できる統計が整えば，人口移動における国際結婚の重要性，異文化間交流とみなされる国際結婚の割合，国際結婚の離婚に終わる傾向等，本書からうかびあがる諸問題において考察が深まるのではなかろうか．本書のような文献調査も含めて国際結婚に関する研究が蓄積されることは，国際化という視点から未来を展望するうえで有意義であろう．（今井博之）